

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

岩田 好美

【所属】(助成決定時)

同志社大学 文化情報学研究科 博士後期課程 2年

【研究題目】

謡曲データベースの構築と能楽における多角的な情報の分析手法の開発

【研究の目的】(400字程度)

能楽は詞章(台本)、舞(所作)、囃子(音曲)で構成された600年続く演劇である。さらに、時代やシテ方の流派によって、能の用語、詞章、曲節、所作、技法等細部に渡るまでの差異があるため、複雑な構成となっている。能楽は1曲1曲を見ていく事は容易だが、全体から細部までを纏めて見る事は容易ではない。それゆえ、今研究の目的は、従来の能楽研究に基づいた上で能楽の構成要素を集約したデータベースを構築するための設計を行うと同時に、リズムの規則を元に数理的分析手法を用いて作品の傾向を見ていく事とした。データベースを設計する際に、数理的手法を用いた分析や能楽研究者や能楽師なども使用できるように考慮しながらデータベースの設計を行なった。

【研究の内容・方法】(800字程度)

現在演じられている演目は主人公や曲趣によって五つに分類されている。その中から、修羅物という武将を主人公とし、殆どの作品が平家物語を本説とする演目16曲を研究対象とした。

1. 地拍子からみる作品の傾向における分析手法について

修羅物16曲において、表氏の世阿弥作能考を基に世阿弥の作品六曲と世阿弥の作品の可能性のある曲二曲と世阿弥以外の作品一〇曲とにグループ分けをした。データの作成は高橋美都氏が整理された修羅物16曲のクセに関するデータとその形式に則って作成した。クセ・キリは、七・五調の音数律を基にした韻文の集合で構成されているが、実際は字余りや字足ラズの句が沢山交えられている。クセ・キリの文章を上半句(X)と下半句(Y)に分け、それぞれの文字の個数の出現回数から相対頻度を算出し、主成分分析を行なった。

2. 謡曲データベースについて

データベースに集約するデータについて、詞章は1曲分のデータ、舞と囃子については伝承の関係上、仕舞と舞囃子の部分のみとした。

一つ目は詞章についてである。能は半句→句→節→小段→段→場→全曲という積層構造を持つ。詞章の構成の体系については、日本古典文学大系「謡曲集」を基とした。最小単位は詞章を形態素に区切ったデータとする。「詞章」テーブルには、形態素データから句(上半句、下半句)、吟、節、小段、段、場、演目のフィールドを作成した。時代や流派による能の用語や曲節の表記法の差異については用語統一テーブルを作成し、統一した形での抽出が可能となるように設計をした。

二つ目は、舞についてである。詞章テーブルにおいて最小単位とした形態素のデータと型名を一致させた。一致をさせる基準と型の名称については、各流派の仕舞型付を元にした。

三つ目は囃子についてである。まず、謡は大きく分けて「詞」の部分、「拍子合ワズ」の部分、「拍子合」の部分から成り立つ。拍子合の部分は何の譜が何拍にあたるという形で明確なリズムの規則があり、この規則を地拍子と言う。地拍子が全演目記された宝生流地拍子謡本集があるので、この謡本を元に設計を行なった。「拍子合」の部分においては、最小単位を一文字毎の仮名データとする。地拍子テーブルにおいて、一文字仮名データから拍子割付の法則、ノリ型、拍子記号、間、モチ、増ブシのフィールドを作成した。

次に囃子は仕舞と舞囃子の部分に関係してくる。地拍子テーブルを元に囃子テーブルとして、囃子謡、笛、小鼓、大鼓、太鼓のテーブルを作成し、地拍子テーブルと一致し、結合ができる形で設計を行なった。

【結論・考察】（４００字程度）

地拍子からみる作品の傾向において、クセのみとキリのみとクセ・キリ合わせた３つの結果を出した。全体の傾向としては修羅物 16 曲の中で世阿弥の作品と世阿弥の可能性が強い曲とは、地拍子の使い方が異なり、世阿弥作品とは言い難い結果が出た。

世阿弥の改作は、地拍子においても異なる傾向を示した。また、キリよりもクセの方が顕著に作者の傾向に違いが現れた。今後は、地拍子による能作者の傾向をより詳細に見ていくと共に、さらに**品詞毎の出現頻度から修辞面における能作者の工夫を探る研究を行なっていく予定である。**

謡曲データベースの設計図である ER 図を作成した。今後は博士論文の研究対象である修羅物の演目を対象に、データ化をし、ER 図を元に、実際に試験実装を行っていく予定である。また、先程述べた分析結果と共に修羅物における謡曲データベースの設計・試験実装を経て、両方の研究結果を合わせた形で博士論文とする予定である。